ある．つまり，経済的に“超大国”（スーパー・ステート）の現在の日本が，政治的・軍事的な“超強国”（スーパー・パワー）になりそうな事実を，日，米，いや世界にとっての大事件として，その意味を明らかにしようと試みている．

そういう点では，訳者も「あとがき」で述べているように，本書は「日本と日本人に対する期待の書であり，警告の書」である．そしてカーン自身が「はしがき」で断わっているように，出版の目的は「議論のきっかけをつくり，読者に刺激を与えることにあって，この問題に決着をつけることではない」．

すでに指摘したように，楽観主義だけが本書を支配しているとはいえない．だがやはり，著者が日本の将来について非常に強気の見方をしていることは事実である．だから，本書を読む方のなかには，くすぐったい思いを通りこして抵抗を感じる人もあるだろう．カーンは，経済大国は軍事大国に進むという国際政治の伝統的通念と，日本人が外人崇拝と排外主義や独立の気運と低姿勢を繰りかえしてきたその歴史的パターンとから，超強国を指向するとみる．

しかし，日本は経済大国イコール軍事大国でない道をすでに歩み始めているといえるし，4次防を発表した程度で軍国主義と批判され，国内の一部が揺れている始末である．高度成長，国際的役割，軍事大国のどれについても，本書が執筆されるまでとそれ以後の日本人の考えはかなり変わったように思う．なお本書は，あまり広範な問題をとらえたせいか，論述がやや大味だという印象をうける．

それでも，日本と日本人が重大な試練に直面しているおりから，外国人の日本観を読むことは，自分の姿を鏡に映しだしてみるという効用がある．欠陥を発見したり，あらためて長所をみつけたり，自己を客観的に見直す‥‥チャンスになる．もっとも，本書は肩をはらないで気軽によんでも結構おもしろい．訳もしっかりしている．著者の意図はともかく，いろいろな読み方，いろいろな受けとり方があっていいだろう．それが，著者のねらいでもあるようだから‥‥．

（福島康人）

デジコン1であそぶ

デジコン1は，カタログによれば“世界最初のオールプラスチック製，ディジタル・コンピュータ”である．1年くらいまえから日本橋の丸善で実演販売をしていたのでご覧になった方も多いことと思う．日本での発売元のＡＢＣ商会が本学会に1セット寄贈してくれたので，早速いじってみた．動力は手でCLOCKと称する板を左右に動かす．左端に押して右端にもどすのが1サイクルである．出力は2進数が3桁出る．プログラムはプラスチックの筒をさしこむことによって組む．昔のIBMのパネルを思いだす．プラスチックの筒にはクロック・ロッドとロジック・ロッドとの2種類がある．ロジック・ロッドは36個所にさすことができる．クロック・ロッドをさしこめるところは18個所である．各ロッドをどこにさしこむべきかを示すにはコーディング・シートを使う．これだけで2進数の加減乗除や，簡単なパズルをとくことができる．プログラムの例が16ばかりあり，それぞれ面白い工夫がこらしてある．以上のように，デジコン1は，まさに小さいけれどもディジタル・コンピュータであり，ディジタル・コンピュータ以外のなにものでもない．

しかし，これを作ったメーカーのねらいはなんであろうか．第1に考えられることは，このようなものを考案すること自体は非常に面白かったにちがいない．デジコン1は純粋に機械的な動きをするので，計算の途中の各部分の動き，それらの関係をみることは，それ自体でも非常に面白い．このようなメカを考えだした人は，ずいぶん時間もかかったことだろうが，また，たいへん面白かったにちがいない．

ふたたび，カタログによれば，メーカーはこれを教育玩具として売りたいらしいのである．そこで私は，早速身近にいたコンピュータ入門者に与えてみた．ところが，私の身の回りにいる人間の質が低いのか，どうも興味が持続しないようで，教育効果はあまりあがらないようである．身近に本物のコンピュータがありすぎるせいかもしれないし，本物のコンピュータで消化不良を起こしかけているので，オモチャであそぶ気持ちのゆとりがないせいかもしれないが，どうもコンピュータ入門用にはあまり適当とは思えなかった．その点，これは，やはりすでにある程度計算機を知っている人のためのオモチャであるようだ．あまりにも計算機に近すぎるのである．この教育玩具をいちばん楽しんであそんだのは，結局，私のセンターでは，どうも私であったらしい．

（原　亨）

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．